

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな学力の定着を図る学習指導の充実 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実 3 豊かな自己表現力の育成</p>
---------------------------	---	----------------------	---

年 度 当 初				評 価 結 果 (10)月			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
確かな学力の定着を図る学習指導の充実	(幼) ○体験的な活動ができる環境や機会を設定する。	○経験が不足していたり、情報が入りにくかったりして、興味・関心がせいまい傾向がある。	○いろいろな事象に興味・関心を持ってかかわることで、考えて行動したり挑戦しようとしたりすることができるようになる。	○身近な事象に興味を持てるように、掲示物等を工夫する。 ○継続的に興味や関心を持てるような題材を工夫し、体験的な活動の場を多く設定する。 ○自分で考えることができるような教材の提示や声のかけ方を工夫する。			
	(小) ○基礎学力が向上するよう、学びへの意欲を高める発問の工夫を取り入れた授業づくりに努める。	○教室環境の工夫により学力が定着しつつあるが、長文を読んで内容を読み取ったり、文章を読んで質問に答えたりする等の読解力に課題がある。	○児童が主体的に学習に取り組む、文章を読んで考えたり質問に答えようとしたりすることができるようになる。	○主発問を的確に行い反応を予想して補助発問を工夫する等の支援を取り入れた授業づくりをする。 ○的確な実態把握ができるよう、実態に合った検査を実施する。 ○つまずきの記録から支援を検討する事例研究会を行う。 ○授業研究会を行い、一人一人の目標を達成できるよう主発問や補助発問を検討する。			
	(中) ○実態把握に基づく支援方法の共通理解と論理的思考力を育成するための支援の工夫に努める。	○基礎学力の定着が課題である生徒、思考力・応用力が課題である生徒と実態は異なるが、視覚的支援や体験的な活動を取り入れることにより意欲的に学習しようとする。また、共通して、教師に一つ一つ具体的に質問されたときは、ヒントをもらいながら答えようとするができるが、知っていることをまとめて説明したり、根拠に基づいて伝えたりするを苦手としている。	○生徒が自分の思考を整理し、多面的に考えたり、根拠に基づいて説明できたりする。	○発達検査等の共通理解や行動観察等を通して生徒の実態把握を行い、生徒の認知特性に応じた思考を高める発問の仕方や支援方法の工夫に取り組む。 ○授業研究を行い、生徒の思考を促す授業ができていくかどうか検討する。			
	(高) ○自学自習の力をつけるために、個々の生徒に応じた学習指導法の改善・工夫をするとともに、家庭学習の習慣化の徹底を図る。	○家庭学習では、内容や分量を自ら調整できない生徒の実態もみられる。日々の授業を活用しながら、指導法を工夫し、生徒の実態に応じて主体的に学習に取り組む姿勢を培う必要がある。	○家庭学習について、個々の生徒が学習時間と目標を設定し、継続して学習できるようにする。	○家庭学習の内容や時間の確認を継続して行い、生徒の学習意欲の喚起を促すとともに個に応じた家庭学習の仕方を具体的に指導する。 ○学部会や進路を語る会などを中心に情報共有し、個々の生徒のつまずきや特性に応じた課題を共通認識し、指導法を工夫する。			
自立と社会参加を	(支) ○家庭と連携し乳幼児のこたばの育ちを促す。  ○通級指導で難聴への理解を深め自己認識を高めるような指導や支援に努める。  ○個々のニーズに合わせた支援や情報提供に努める。  ○聴覚障がいへの理解が深まるよう啓発に努める。	○子どもへの接し方に支援の必要な親子があり、伝わりやすい話しかけについての意識を高める必要がある。  ○年齢に応じた自己認識が育っていないため問題解決に向けた行動を起こしにくい児童生徒が多い。  ○支援会議等で本人・保護者・担任との間に考え方や意識の違いが見られ、ニーズの把握が難しい場合がある。 ○医療との学習会で情報共有をしたり、研修会の講師として福祉や教育との連携を図っている。	○子どもの気持ちに寄り添いながらかかわることのできる支援を学び実践につなげることができる。 ○場面に応じて学んだことを活かし問題解決をしようとする。  ○難聴に関する研修を行い様々なニーズに対応できるようにする。 ○関係機関と連携し、県内の聴覚障がい児に関する情報交換ができる。	○担当者がかかわり方のモデルを示すとともに、視覚的な支援方法を具体的に示す。  ○通級指導の連絡帳を通じて担任や保護者と情報を共有し、課題に対して共通の認識を持てるようにする。  ○難聴児にかかわる関係者に対し校内研修会への参加を募ったり情報交換の場を提供したりして、難聴への理解を促す情報発信をする。 ○聴覚障がいに関するリーフレットの配布や啓発活動を行う。			
	(幼) ○幼児の実態に応じ、様々な人とかかわることができる場を設定したり、かかわり方を支援したりする。	○基本的な生活習慣や生活のきまり、遊びのルール等がまだ身に付いていない場面も見られるが、他者とのかかわりを好む。	○同年齢の園児とのかかわりを通して、集団での生活のきまりや遊びのルール等を身に付け、友だちと楽しくかかわれるようになる。	○友だちとのかかわりの中で、ルールの定着を図ったり意欲を高めたりするように学校間や居住地域での交流および共同学習の場を設定する。 ○保護者研修会を実施し、子どもたちへのかかわり方について共通理解を図る場を設定する。			

めざしたキャリア教育の充実	(小) ○基本的な生活習慣の定着を図り、社会生活に向けて望ましい習慣や態度を育てる。	○ルールを守ろうとする姿が見られるようになってきているが、基本的な生活習慣、学校生活のきまり等について自ら判断して守ろうとすることは不十分であり指導が必要である。また、社会生活におけるルールなどは未習得であることが多い。	○基本的な生活習慣が定着し、集団活動や社会生活においてきまりやルールを自ら守ろうとする。	○合同学活での集団活動等でモデルを示したり、どう行動したらよいか気づけるような声かけをしたりする。 ○場面をとらえて適切な行動ができるよう声かけを行う。				
	(中) ○進路に関する学習や職場体験学習の充実を行い、生徒自らの意思で進路を決定できる力を育てるとともに、社会生活に必要なマナーやルールについて学習する機会を設定する。	○将来就きたい職業や高等部への進路をはっきり決めている生徒、まだ将来像が描けず次の進路先についても決めかねている生徒と実態は異なる。 また、社会生活に必要なマナーやルールについても言葉づかいや行動について一人一人の実態や課題が大きく異なっている。	○進路に関する学習を通して、生徒自らの意思で進路を決定する。 ○職場見学・職場体験学習等を通して、社会生活に必要なマナーやルールについて知り、実践しようとする。	○体験入学などの進路に関する学習や職場体験学習の充実を図る。 ○職場体験学習や進路に関する学習等を通して、社会生活に必要なマナーやルールが身につくようにする。				
	(高) ○常に自立と社会参加を意識した生徒指導の徹底を図り、課題対応能力やキャリアプランニング能力等を育成し、規律ある生活習慣を身につけられるようにする。	○多くの生徒が落ち着いて生活できている。しかしながら、自分で考えて行動する習慣が身につけていない現状もみられる。そのため、自立や社会参加に向けてさらに自ら考え行動する生活習慣の確立を目指す必要がある。	○将来の社会生活を意識し、規律(時間・言葉づかい)を守り、自ら考えながら学校生活を送る。 ○社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。	○生徒が課題意識をもって生活できるように、全教職員で共通認識し、指導を周知徹底する。 ○生徒版段階表や諸検査をもとに実態把握し、生徒一人一人の進路を考えた授業の工夫をする。				
豊かな自己表現力の育成	(幼) ○心の動きを大切にし、表現力を高める指導を工夫する。	○自分の思いを伝えたい気持ちはあるが、その気持ちを伝えることが難しい場面が見られる。	○朝の会の伝え合い活動で幼児が思いを表出できるようになる。	○幼児の思いをくみ取り、表現できるように支援する。 ○話しかけが理解できるように実物や絵等を提示する。 ○話し合いの場等を設定し、自分の思いを伝えたり、友だちの思いをくみ取ったりする場面を設定する。				
	(小) ○友だちとの活動を通して自分の思いや考えを伝え合え、相手の話を理解できる力を育てる。	○自分の考えを友だちや先生に主体的に伝えようとする場面が増えている。 ○自分の思いを周りの人に伝えようとする気持ちはあるが、言葉を正しく使って表現することが未習得である部分がある。 ○友達の話最後まで顔を見ながら聞いて理解することはまだ難しい。	○自分の経験や考えを、様子や気持ちを表す言葉を使って詳しく伝えようとする。 ○相手の話を最後まで聞き、自分の考えを伝えようとする。	○学習時間内では、相手の顔を最後まで見て話を聞く、はっきりと相手に自分の思いを伝える等の学習ルールを徹底する。 ○学級活動等の集団活動において、友達や先生と伝え合う学習場面を多く設定する。 ○帰りの会等において、ヒントになるような声かけをしたり、気持ちを表現する言葉カードを掲示したりする。				
	(中) ○外部専門家によるワークショップや弁論、報告会、交流活動等を通して自己表現力を育成する。	○自分の思いは伝えられるが、相手の気持ちや立場を考えずに一方的であったり、自信を持って発言できなかつたりするなど、一人一人の実態や課題は異なる。報告会などでは、事前の練習を積み重ねることにより、自信を持って表現できつつある。	○自分の考えを自信を持って表現できる。 ○相手の立場や場に応じた表現ができるようになる。	○自分の思いを自信をもって豊かに表現できるよう、様々な報告会、弁論大会や外部講師によるワークショップなどの機会を設定する。 ○話し合いの際には、「話し合いのオキテ」を意識させ、相手にわかるように表現できるようにする。				
	(高) ○現場体験学習等を活用し、社会を意識した体験的学習を充実させるとともに、弁論大会や帯自立活動等を活用し自己表現力を育成するなど、コミュニケーション力を身につける。また、社会自立のために自分の心身の健康と向き合うことができるようにする。	○実際に職場の人間関係を円滑にしたりするためには、コミュニケーション力が必要であることは少しずつはあるが生徒に理解されつつある。更に自己表現力を高めるなど自ら積極的にコミュニケーション力を身につけるなどの実践力が必要である。また、自立や社会参加に向けて、自ら体調管理に努めることも課題である。	○現場体験学習等で相手や場に応じて、適切にコミュニケーション力が向上する。 ○帯自立活動をはじめ、弁論大会やステージ発表を通して、表現力が向上していく。 ○自分らしく生きるために心身の健康に関する意識が高まる。	○具体的な場面を想定して事前に練習を積み、実際の場面で活かすようにする。 ○帯自立活動を活用し、状況に応じた日本語の使い方(謙譲語・尊敬語)や意味の学習を積み重ねること、一人一人の日本語力を伸ばす。 ○心身の健康を保つため、自立活動を中心に就労や一人暮らしを想定し、自らストレスに対処する方策等について考える場面を設定する。				